日蓮大聖人御書全集

曽谷殿御返事（そやどのごへんじ）

（輪陀王の事（りんだおうこと））

新版1439～1447

曽谷殿御返事（輪陀王の事）

弘安2年('79) 8月17日　58歳　曽谷道宗

焼き米二俵、給び畢わんぬ。

米は少しと思しめし候えども、人の寿命を継ぐものにて候。命をば、三千大千世界にても買わぬ物にて候と、仏は説かせ給えり。米は命を継ぐ物なり。譬えば、米は油のごとく、命は灯のごとし。法華経は灯のごとく、行者は油のごとし。檀那は油のごとく、行者は灯のごとし。

一切の百味の中には、乳味と申して牛の乳第一なり。涅槃経の七に云わく「なお諸味の中に乳は最もこれ第一なるがごとし」云々。乳味をせんずれば酪味となる。酪味をせんずれば、乃至醍醐味となる。醍醐味は五味の中の第一なり。法門をもって五味にたとえば、儒家の三千、外道の十八大経は衆味のごとし。阿含経は醍醐味なり。阿含経は乳味のごとく、観経等の一切の方等部の経は酪味のごとし。一切の般若経は生蘇味、華厳経は熟蘇味、無量義経と法華経と涅槃経とは醍醐のごとし。また涅槃経は醍醐のご

とし、法華経は五味の主のごとし。妙楽大師云わく「もし教旨を論ぜば、法華はただ開権・顕遠のみをもって教の正主となす。独り妙の名を得。意ここに在り」云々。また云わく「故に知んぬ、法華はこれ醍醐の正主なることを」等云々。この釈は、正しく法華経は五味の中にはあらず。この釈の心は、五味は寿命をやしなう、寿命は五味の主なり。

天台宗には二つの意あり。一には、華厳・方等・般若・涅槃・法華は、同じく醍醐味なり。この釈の心は、爾前と

法華とを相似せるにたり。世間の学者等、この筋のみを知って、法華経は五味の主と申す法門に迷惑せるゆえに、諸宗にたぼらかさるるなり。「開・未開異なれども、同じく円なり」と云々。これは迹門の心なり。「諸経は五味、法華経は五味の主」と申す法門は、本門の法門なり。この法門は、天台・妙楽ほぼ書かせ給い候えども、分明ならざるあいだ、学者の存知すくなし。

この釈に「もし教旨を論ぜば」とかかれて候は、法華経の題目を「教旨」とはかかれて候。「開権」と申すは、五字

の中の「華」の一字なり。「顕遠」とかかれて候は、五字の中の「蓮」の一字なり。「独り妙の名を得」とかかれて候は、「妙」の一字なり。「意ここに在り」とかかれて候は、法華経を一代の意と申すは題目なりとかかれて候ぞ。これをもって知るべし、法華経の題目は一切経の神、一切経の眼目なり。

大日経等の一切経をば法華経にてこそ開眼供養すべきところに、大日経等をもって一切の木画の仏を開眼し候えば、日本国の一切の寺塔の仏像等、形は仏に似たれど

も、心は仏にあらず、九界の衆生の心なり。愚癡の者を智者とすること、これより始まれり。国のついえのみ入って祈りとならず。還って仏変じて魔となり鬼となり国主乃至万民をわずらわす、これなり。今、法華経の行者と檀那との出来する故に、百獣の師子王をいとい、草木の寒風をおそるるがごとし。これはしばらくおく。

法華経は何故ぞ諸経に勝れて一切衆生のために用いることなるぞと申すに、譬えば、草木は大地を母とし、虚空を父とし、甘雨を食とし、風を魂とし、日月をめのととし

て生長し、花さき菓なるがごとく、一切衆生は実相を大地とし、無相を虚空とし、一乗を甘雨とし、已今当第一の言を大風とし、定慧力荘厳を日月として妙覚の功徳を生長し、大慈大悲の花さかせ、安楽仏果の菓なって、一切衆生を養い給う。

一切衆生、また食するによりて寿命を持つ。食に多数あり。土を食し、水を食し、火を食し、風を食する衆生もあり。求羅と申す虫は風を食す。うぐろもちと申す虫は土を食す。人の皮肉・骨髄等を食する鬼神もあり。尿糞

等を食する鬼神もあり。寿命を食する鬼神もあり。声を食する鬼神もあり。石を食するいお、くろがねを食するばくもあり。地神・天神・竜神・日月・帝釈・大梵王・二乗・菩薩・仏は仏法をなめて身とし、魂とし給う。

例せば、乃往過去に輪陀王と申す大王ましましき。一閻浮提の主なり、賢王なり。この王はなに物をか供御とし給うと申せば、白馬の鳴く声をきこしめして、身も生長し身心も安穏にして、よをたもち給う。れいせば、蝦蟇と申す虫の、母のなく声を聞いて生長するがごとし。秋のはぎ

のしかの鳴くに花のさくがごとし。象牙草のいかずちの声にはらみ、柘榴の石におうてさかうるがごとし。

されば、この王、白馬をおおくあつめてかわせ給う。また、この白馬は白鳥をみてなく馬なれば、おおくの白鳥をあつめ給いしかば、我が身の安穏なるのみならず、百官万乗もさかえ、天下も風雨時にしたがい、他国もこうべをかたぶけてすねんすごし給うに、まつりごとのそういにやはんべりけん、また宿業によって果報や尽きけん、千万の白鳥一時にうせしかば、また無量の白馬もなくことやみぬ。

大王(だいおう)は白馬(はくば)の声(こえ)をきかざりしゆえに、花(はな)のしぼめるがごとく、月(つき)のしょく蝕するがごとく、御身(おんみ)の色(いろ)かわり、力(ちから)よわく、六根(ろっこん)もうもう濛々(もうもう)として耄(ほうけ)たるがごとくありしかば、きさき后もうもうしくならせ給(たま)い、百官(ひゃっかんばんじょう)万乗もいかんがせんとなげき歎、天(てん)もくもり曇、地(ち)もふるい震、大風(おおかぜ)・かんばちし旱魃、けかち・やくびょう飢渇疫病に人(ひと)の死(し)すること、肉(にく)はつか塚、骨(ほね)はかわらとみえしかば瓦見、他国(たこく)よりもおそい襲来(きた)れり。

この時(とき)、大王(だいおう)いかんがせんとなげき歎給(たま)いしほどに、せんず詮るところは仏神(ぶっしん)にいのる祈にはしくべからず。この国(くに)に、も

とより外道おおく国々をふさげり。また仏法というものを
おおくあがめおきて国の大事とす。いずれにてもあれ、
白鳥をいだして白馬をなかせん法をあがむべし。まず外道
の法におおせつけて、数日おこなわせけれども、白鳥一疋
もいでこず、白馬もなくことなし。この時、外道のいのり
をとどめて、仏教におおせつけられけり。その時、馬鳴菩薩
と申す小僧一人あり。めしいだされければ、この僧のたま
わく「国中に外道の邪法をとどめて仏法を弘通し給うべく
ば、馬をなかせんことやすし」という。勅宣に云わく「おお

せのごとくなるべし」と。その時に馬鳴菩薩、三世十方の仏にきしょうし申せしかば、たちまちに白鳥出来せり。白馬は白鳥を見て一こえなきけり。大王、馬の声を一こえきこしめして、眼を開き給う。白鳥二ひき、乃至百千いできたりければ、百千の白馬一時に悦びなきけり。大王の御いろなおること、日しょくのほんにふくするがごとし。身の力、心のはかり事、先々には百千万ばいこえたり。ささきもよろこび、大臣・公卿いさみて、万民もたなごころをあわせ、他国もこうべをかたぶけたりとみえて候。

祈請　色直　計　喜　頭　倍超　后　掌　傾

今のよも、またこれにたがうべからず。天神七代・地神五代、已上十二代は成劫のごとし。先世のかいりきと福力とによって、今生のはげみなけれども、国もおさまり、人の寿命も長し。人王のよとなりて二十九代があいだは先世のかいりきもすこしよわく、今生のまつりごともはかなかりしかば、国にようやく三災七難おこりはじめたり。なお、かんどより三皇五帝の世をおさむべきふみわたりしかば、それをもって神をあがめて国の災難をしずむ。人王第三十代欽明天皇の世となりて、国には先世のかい

今世　違　天神七代・地神五代　已上十二代　成劫　先世　戒力　福力　励　今生　治　人寿命　人王　代　二十九代　先世　戒力　少弱　今生　政　果無　漸　三災七難　起　漢土　書渡　三皇五帝　治　崇　鎮　人王第三十代欽明天皇　戒

福薄

ふくうすく、悪心ごうじょうのものおおく出で来て、善心

多　　善心

おろかに悪心はかしこし。外典のおしえはあさし、つみも

愚　賢　　教　浅　罪

おもきゆえに、外典すてられ内典になりしなり。れいせば、

重　捨　　例

もりやは日本の天神七代・地神五代が間の百八十神をあが

守屋　天神七代　地神五代　百八十神　崇

めたてまつりて、仏教をひろめずしてもとの外典となさん

弘　外典

といのりき。聖徳太子は教主釈尊を御本尊として、

祈　聖徳太子　教主釈尊　御本尊

法華経・一切経をもんじょとして両方のしょうぶありし

法華経　一切経　文書　両方　勝負

に、ついには、神はまけ仏はかたせ給いて、神国はじめて

負　勝　　初

仏国となりぬ。天竺・漢土の例のごとし。「今この三界は、

仏国　天竺　漢土　今　三界

皆これ我が有なり」の経文あらわれさせ給うべき序なり。

欽明より桓武にいたるまで、二十よ代・二百六十余年が間、仏を大王とし神を臣として世をおさめ給いしに、仏教はすぐれ神はおとりたりしかども、いまだよおさまることなし。いかなることにやとうたがわしかりしほどに、桓武の御宇に伝教大師と申す聖人出来して、勘えて云わく「神はまけ仏はかたせ給いぬ。仏は大王、神は臣かなれば、上下あいついでれいぎただしければ国中おさまるべしとおもうに、国のしずかならざることふしんなるゆえに

一切経をかんがえて候えば、道理にて候いけるぞ。仏教におおきなるとがありけり。一切経の中に法華経と申す大王おわします。ついで華厳経・大品経・深密経・阿含経等は、あるいは臣の位、あるいはさぶらいのくらい、あるいはたみの位なりけるを、あるいは般若経は法華経にはすぐれたり〈三論宗〉、あるいは深密経は法華経にすぐれたり〈法相宗〉、あるいは華厳経は法華経にすぐれたり〈華厳宗〉、あるいは律宗は諸宗の母なりなんど申して、一人として法華経の行者なし。世間に法華経を読誦するは、

還っておこづき、うしなうなり。これによって、天もいかり、守護の善神も力よわし」云々。いわゆる「法華経をほむといえども、返って法華の心をころす」等云々。

南都七大寺・十五大寺、日本国中の諸寺諸山の諸僧等、このことばをききておおきにいかり、「天竺の大天、漢土の道士、我が国に出来せり。いわゆる最澄と申す小法師これなり。せんずるところは、行きあわんずる処にてかしらをわれ、かたをきれ、おとせ、うて、のれ」と申せしかども、桓武天皇と申す賢王たずねあきらめて、六宗はひが事

痴失　天怒　讃　殺　聞大　怒　詮　頭　破肩切落　打罵　明　僻

なりけりとて、初めてひえい山をこんりゅうして天台法華宗とさだめおかせ、円頓の戒を建立し給うのみならず、七大寺・十五大寺の六宗の上に法華宗をそえおかる。せんずるところ、六宗を法華経の方便となされしなり。れいせば、神の仏にまけて門まぼりとなりしがごとし。日本国もまたまたかくのごとし。「法華最第一」の経文、初めてこの国に顕れ給い、「能くひそかに一人のためにも、法華経を説かば」の如来の使い、初めてこの国に入り給いぬ。桓武・平城・嵯峨の三代、二十余年が間は、日本一州皆法華経の

行者なり。

しかれば、栴檀には伊蘭、釈尊には提婆のごとく、伝教大師と同時に弘法大師と申す聖人出現せり。漢土にわたりて大日経・真言宗をならい、日本国にわたりてありしかども、伝教大師の御存生の御時はいとう法華経に大日経すぐれたりということはいわざりけるが、伝教大師、去ぬる弘仁十三年六月四日にかくれさせ給いてのち、ひまをえたりとやおもいけん、弘法大師、去ぬる弘仁十四年正月十九日に、真言第一・華厳第二・法華第三、法華経は

戯論の法、無明の辺域、天台宗等は盗人なりなんど申す書どもをつくりて、嵯峨の皇帝を申しかすめたてまつりて、七宗に真言宗を申しくわえて、七宗を方便とし、真言宗は真実なりと申し立て畢わんぬ。

その後、日本一州の人ごとに真言宗になりし上、その後また、伝教大師の御弟子・慈覚と申す人、漢土にわたりて、天台・真言の二宗の奥義をきわめて帰朝す。この人、金剛頂経・蘇悉地経の二部の疏をつくりて、前唐院と申す寺を叡山に申し立て畢わんぬ。これには大日経第一・

法華経第二、その中に弘法のごとくなる過言かずうべからず。せんぜんに、しょうしょう申し畢わんぬ。

智証大師、またこの大師のあとをついで、おんじょう寺に弘通せり。とうじ、寺とて国のわざわいとみゆる寺これなり。叡山の三千人は、慈覚・智証おわせずば、真言すぐれたりと申すをばもちいぬ人もありなん。円仁大師に一切の諸人くちをふさがれ、心をたぼらかされて、ことばをいだす人なし。王臣の御きえもまた伝教・弘法にも超過してみえ候えば、えい山、七寺、日本一州一同に「法華経は

大日経におとり（劣）」と云々（雲）。法華経の弘通の寺々ごとに真言（宗）ひろ（広）まりて法華経のかしら（頭）となれり。かくのごとくして、すでに四百余年（四百余年）になり候（そうら）いぬ。ようやくこの邪見（邪）ぞうじょう（増長）して、八十一乃至五の五王（八十一乃至五の五王）、すでにうせぬ（失）。仏法うせしかば、王法すでにつき畢（尽）わんぬ。

あまつさえ、禅宗（禅宗）と申す大邪法、念仏宗（念仏宗）と申す小邪法、真言（真言）と申す大悪法（大悪法）、この悪宗（悪宗）、はなをならべて一国にさかんなり（盛）。天照太神（天照太神）はたましいをうしなって（魂失）うじこをまぼらず（氏子守）、八幡大菩薩（八幡大菩薩）は威力よわくして国を守護せず（国守護）、けっくは（結句）

他国の物とならんとす。日蓮このよしを見るゆえに、「仏法の中の怨」「ともに地獄に堕ちん」等のせめをおそれてほぼ国主にしめせども、かれらが邪義にたぼらかされて信じ給うことなし。還って大怨敵となり給いぬ。

法華経をうしなう人、国中に充満せりと申せども、人しることなければ、ただぐちのとがばかりにてあること。今はまた法華経の行者出来せり。日本国の人々、癡かの上にいかりをおこす。邪法をあいし、正法をにくむ。三毒ごうじょうなる一国、いかでか安穏なるべき。壊劫の時は大

の三災（さんさい）起（おこる）。いわゆる火災（かさい）・水災（すいさい）・風災（ふうさい）なり。また減劫（げんこう）の時（とき）は小（しょう）の三災（さんさい）おこる。ゆわゆる飢渇（けかち）・疫病（えきびょう）・合戦（かっせん）なり。飢渇（けかち）は大貪（だいとん）よりおこり、やくびょうはぐちよりおこり、合戦（かっせん）は瞋恚（しんに）よりおこる。今（いま）、日本国（にほんこく）の人々（ひとびと）四十九億九万四千八百二十八人（はっぴゃくにじゅうはちにん）の男女（なんにょ）、人々（ひとびと）ことなれども、同じく一つの三毒（さんどく）なり。いわゆる、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）を境（きょう）としておこれる三毒（さんどく）なれば、人（ひと）ごとに、釈迦（しゃか）・多宝（たほう）・十方（じっぽう）の諸仏（しょぶつ）を一時（いちじ）に罵（ののしり）、せめ（責）、流（なが）しうしなう（失）なり。これ即（すなわ）ち小（しょう）の三災（さんさい）の序（ついで）なり。

しかるに、日蓮が一るい、いかなる過去の宿じゅうにや、法華経の題目のだんなとなり給うらん。これをもっておぼしめせ、今、梵天・帝釈・日月・四天、天照太神・八幡大菩薩、日本国の三千一百三十二社の大小のじんぎは、過去の輪陀王のごとし。白馬は日蓮なり。白鳥は我らが一門なり。白馬のなくは我らが南無妙法蓮華経のこえなり。この声をきかせ給う梵天・帝釈・日月・四天等、いかでか色をましひかりをさかんになし給わざるべき、いかでか我らを守護し給わざるべきと、つよづよとおぼしめすべし。

そもそも、貴辺の去ぬる三月の御仏事に鵝目その数有りしかば、今年一百よ人の人を山中にやしないて、十二時の法華経をよましめ、談義して候ぞ。これらは末代悪世には一えんぶだい第一の仏事にてこそ候え。いくそばくか過去の聖霊もうれしくおぼすらん。釈尊は孝養の人を世尊となづけ給えり。貴辺あに世尊にあらずや。

故大進阿闍梨のことなげかしく候えども、これまた法華経の流布の出来すべきいんえんにてや候らんと思おぼしめすべし。事々、命ながらえば、その時申すべし。

弘安二年己卯八月十七日（こうあんにねんつちのとうはちがつじゅうしちにち）

曽谷道宗御返事（そやどうそうごへんじ）

日蓮（にちれん）　花押（かおう）